



埼玉県マスコット「コバトン」「さいたまっちゃん」

彩の国経済の動き

－ 埼玉県経済動向調査 －

＜令和6年4月～5月の指標を中心に＞

埼玉県 企画財政部 計画調整課

令和6年6月28日

本経済動向調査は、埼玉県内における生産、雇用、物価、消費、企業動向など、経済関連の各種統計指標を時系列で見ることにより、その動向を把握・分析したものです。また、統計指標の収集・分析に加え、他の調査機関の経済関係報告の概要を取りまとめ、県経済の動向を総合的に把握できるものとしています。

～目 次～

(タイトル)	ページ
1 【特集】 経済人コメント	2
2 本県の経済概況 <県内経済の基調判断>	3
3 県内経済指標の動向	4
(1) 鉱工業指数 <生産・出荷・在庫>	4
(2) 雇用	6
(3) 消費者物価	7
(4) 消費	7
ア 家計消費	7
イ 百貨店・スーパー、コンビニエンスストア、 家電大型専門店、ドラッグストア、ホームセンター販売額	8
ウ 新車登録・届出台数	9
(5) 住宅投資	9
(6) 企業動向	10
ア 倒産	10
イ 景況感	11
ウ 設備投資	13
4 経済情報	15
(1) 各種経済報告等	15
ア 内閣府「月例経済報告（6月）」	15
イ 経済産業省関東経済産業局「管内の経済動向（4月のデータを中心に）」	16
ウ 財務省関東財務局「埼玉県の経済情勢報告（4月判断）」	18
エ 財務省関東財務局「管内経済情勢報告（4月判断）」	19
(2) 今月のキーワード「中堅企業」	20
(3) 今月のトピック「埼玉県内企業の雇用」	21

1 【特集】 経済人コメント

四半期(3月、6月、9月、12月)ごとに県内の経済各分野有識者の方々に、足元の経済動向や見通し等についてコメントを頂いております。



相変わらず、生活にかかわる様々なものの値上げが話題に上ります。いくら慣れてきたかもしれませんが、日々物価高を実感している人も多いのではないのでしょうか。その一方で、最近の報道では、私たちにとって高い日本の物価も海外からの旅行者にとってはとてつもなく安く感じられる、というストーリーもよくみられます。こうしたことは、一昔前に日本から海外へ旅行をするときに感じるが多かったように思えます。

このような、国内の物価高や海外から見た日本の物価安の背景として、「円安によるものだ」という説明が多いようです。このような説明の言外には「そのうち円安が収まれば物価も落ち着くだろう」という期待があるのかもしれませんが。悲観的な見方としては、「日本は戦後の高度成長期以降貯めこんできた豊かさを消費して、貧しくなっていく過程にある」というものもあるようです。

人手不足に関しても身近なところで実感している人も多いでしょう。それなりに高い賃金を支払っているところでは人員を確保できているようですので、人手不足というよりも、今以上の賃金を支払う余力がない、という見方もできるかもしれません。

埼玉大学経済学部 准教授 丸茂 幸平



2024年3月期の企業決算では、トヨタ自動車の営業利益が5兆円を突破し、国内上場企業は円安等を背景に3期連続で過去最高益を計上する等、好調を維持しています。一方でエネルギーや原材料価格の高騰、人件費の上昇が続く中で価格転嫁は限定的であり、5月の倒産件数が小規模企業を中心に全国で11年ぶりに1,000件台に達する等、経済の二極化が進行しています。また、少子高齢化による慢性的な人手不足が続く中で、人材の獲得競争に拍車がかかっており、中小企業にとっては厳しい状況が続いています。そうした中、7月3日に埼玉県の誇る偉人である渋沢栄一翁を肖像とした新1万円札が発行されます。この新札発行を契機に、埼玉県では渋沢・埼玉プロジェクトを立ち上げ、さまざまなイベント等を実施していますが、埼玉の魅力を再発見していただく機会にいただき、地域の活性化につながることを期待しております。

一般社団法人埼玉県商工会議所連合会 会長 池田 一義



日本全体が明るい雰囲気になり人流も活発化したが、地域・業態での格差が生じているようだ。売上・購買客数増加と回答する事業主は、主体的に販売価格の値上げを決定したか、ターゲットが明確な新業態の経営者だ。仕入れ価格高騰によって値上げを余儀なくされた結果で売上が増加した業態では、粗利が上がりず事業拡大の余地はない。積極的な経営で売上を高い水準で維持できている小規模事業主は少なくないが、地域の経済停滞を危惧し投資を控える。アベノミクスの大規模金融緩和の象徴であった「マイナス金利政策」が解除されたが、メディアでは更なる利上げを求める声が何故か大きい。デフレ・経済停滞からの脱却を図る方針を掲げ、デマンドブルのインフレが望ましいといいつつ個人消費に水を差す政策や、経済成長が先行き不透明ななか「金融政策の正常化」「財政再建・財政健全化」の美名に隠されたステルス増税では人心が離れるばかりだ。実質賃金が25か月連続でマイナスとなり、過去最長とあっては、世帯の可処分所得が増える幸せ感のある暮らしは期待できない。

埼玉県商店街振興組合連合会 理事長 大木 敬治



埼玉県の景気は緩やかに持ち直している。当財団が埼玉県内企業を対象に四半期ごとに実施している、企業経営に関する直近4月のアンケート調査では、自社業況のBSI（「良い」-「悪い」の企業割合）は+20と、13四半期連続してプラスで推移しており、「良い」とする企業が多い状態が続いている。

最近、「物価上昇」と「賃上げ」の話題を聞かない日はないが、埼玉県においては物価上昇の影響を加味した実質賃金が、24か月連続のマイナスから今年1月にプラスに転じた。

物の価格は落ち着きつつあるが、電気・ガス料金の上昇を抑えるための緩和措置が5月使用分にて終了したこと、サービス価格の上昇がみられること、企業物価が再び上昇傾向にあることなどから、今後も物価上昇が続くリスクは残る。

企業にとっては厳しい判断となるが、物価上昇により個人消費が失速しないよう、力強い賃金上昇が継続し、賃金と物価の好循環が広がっていくことを期待したい。

公益財団法人 埼玉りそな産業経済振興財団 主席研究員 太田 富雄

2 本県の経済概況 <県内経済の基調判断>

総合判断	前月からの判断推移
県経済は、一部に弱さがみられるものの、持ち直している。	

生産	一進一退の動きとなっている	前月からの判断推移
<ul style="list-style-type: none"> ■ 4月の鉱工業生産指数(季節調整済)は97.3(前月比▲4.5%、前年同月比▲6.6%)。同出荷指数は101.8(前月比+3.0%、前年同月比▲2.3%)。同在庫指数は100.2(前月比▲0.6%、前年同月比▲3.8%)。 ■ 県内の生産活動は、一進一退の動きとなっている(5か月連続で個別判断据え置き)。 		

雇用	持ち直している	前月からの判断推移
<ul style="list-style-type: none"> ■ 4月の有効求人倍率(季節調整済、新規卒者除きパートタイム労働者含む)は1.03倍(前月比±0.00ポイント、前年同月比▲0.04ポイント)となった。なお、県内を就業地とする求人数を用い算出した就業地別の有効求人倍率は1.18倍。 ■ 4月の完全失業率(南関東)は3.1%(前月比(原数値)+0.2ポイント、前年同月比+0.3ポイント)。 ■ 県内の雇用情勢は、持ち直している(9か月連続で個別判断据え置き)。 		

消費者物価	上昇しているものの、緩やかな基調となっている	前月からの判断推移
<ul style="list-style-type: none"> ■ 4月の消費者物価指数(さいたま市、令和2年=100)は総合指数で106.9となり、前月比+0.4%、前年同月比は+2.3%となった。 ■ 前月との比較で、内訳を寄与度で見ると「教養娯楽」、「食料」などは上昇した。なお、「保険医療」などは下落した。前年同月から2.3%上昇した内訳を寄与度で見ると、「食料」、「教養娯楽」などの上昇が要因となっている。なお、「光熱・水道」は下落した。 ■ 生鮮食品及びエネルギーを除く総合指数は105.9となり、前月比+0.3%、前年同月比は+2.3%となった。 ■ 県内の消費者物価は、上昇しているものの、緩やかなペースとなっている(6か月連続で個別判断据え置き)。 		

消費	一部に弱い動きがみられるものの、底堅く推移している	前月からの判断推移
<ul style="list-style-type: none"> ■ 4月の家計消費支出(関東地方、2人以上世帯)は348千円(前年同月比+6.0%)となり、3か月連続で前年同月実績を上回った。 ■ 4月の百貨店・スーパー販売額(県内全店)は1,137億円(前年同月比+1.5%)となり、23か月連続で前年同月実績を上回った。 ■ 4月のコンビニエンスストア販売額(県内全店)は555億円(前年同月比▲0.7%)となり、30か月ぶりに前年同月実績を下回った。 ■ 4月の家電大型専門店販売額(県内全店)は187億円(前年同月比+11.2%)となり、2か月連続で前年同月実績を上回った。 ■ 4月のドラッグストア販売額(県内全店)は412億円(前年同月比+2.7%)となり、23か月連続で前年同月実績を上回った。 ■ 4月のホームセンター販売額(県内全店)は196億円(前年同月比+1.2%)となり、2か月連続で前年同月実績を上回った。 ■ 5月の新車登録・届出台数は14.3千台(前年同月比▲3.6%)となり、5か月連続で前年同月実績を下回った。 ■ 県内の消費状況は、一部に弱い動きがみられるものの、底堅く推移している(4か月連続で個別判断据え置き)。 		

住宅投資	やや弱含みがみられる	前月からの判断推移
<ul style="list-style-type: none"> ■ 4月の新設住宅着工戸数は4,203戸(前年同月比+0.8%)となり、3か月連続で前年同月実績を上回った。 ■ 持家が1,034戸(同+7.3%)、貸家が1,436戸(同▲8.9%)、分譲が1,725戸(同+6.3%)となっている。 ■ 県内の住宅投資は、やや弱含みがみられる(4か月連続で個別判断据え置き)。 		

企業倒産	増加基調にある	前月からの判断推移
<ul style="list-style-type: none"> ■ 5月の企業倒産件数は40件(前年同月比+14件)となった。 ■ 負債総額は34.16億円(前年同月比+10.12億円)、負債10億円以上の大型倒産の発生はなかった。 ■ 産業別では建設業が11件と最多。サービス業他10件、卸売業9件と続いた。 ■ 県内の企業倒産状況は、増加基調にある(3か月連続で個別判断据え置き)。 		

景況判断	持ち直しに足踏みがみられる	前月からの判断推移
<ul style="list-style-type: none"> ■ 埼玉県産業労働部 四半期経営動向調査によると、令和6年1~3月の「経営者の景況感DI」は▲41.0となり、前期(▲41.9)から0.9ポイント増加した(3期ぶりに改善)。 ■ 財務省関東財務局法人企業景気予測調査によると、令和6年4~6月期の「企業の景況判断BSI」は、全規模・全産業ベースで「下降」超幅が拡大している。 ■ 県内の景況判断の状況は、持ち直しに足踏みがみられる(個別判断引き下げ)。 		

設備投資	持ち直している	前月からの判断推移
<ul style="list-style-type: none"> ■ 埼玉県産業労働部 四半期経営動向調査によると、令和6年1~3月に設備投資を実施した企業は20.3%で、前期(19.3%)から1.1ポイント増加した(2期ぶりに増加)。前年同期比では0.5ポイント減少。 ■ 財務省関東財務局法人企業景気予測調査によると、令和6年度の設備投資は全規模・全産業ベースで前年比18.0%の増加見込みとなっている。 ■ 県内の設備投資の状況は、持ち直している(9か月連続で個別判断据え置き)。 		

景気指数	足踏みを示している	前月からの判断推移
<ul style="list-style-type: none"> ■ 4月の景気動向指数(CI一致指数)は、109.7となり、前月と比較して横ばいとなった。 ■ 先行指数は、102.0(前月比▲5.6ポイント)となり、3か月連続の下落となった。 ■ 遅行指数は、89.3(前月比+0.5ポイント)となり、2か月ぶりの上昇となった。 ■ 県内の景気動向指数(CI一致指数)は、足踏みを示している(4か月連続で個別判断据え置き)。(埼玉県統計課「埼玉県景気動向指数」令和6年4月分概要) 		

3 県内経済指標の動向

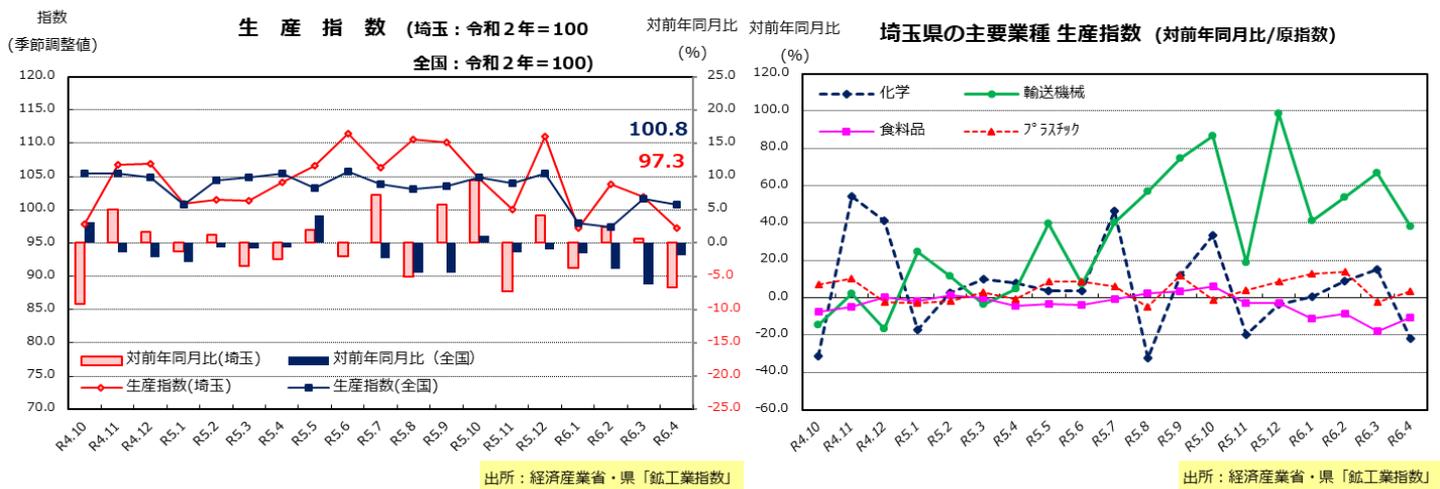
※注記が無い場合、指数、前月比は季節調整値を用い、前年同月比は原指数を用いています。
前月比は経済活動の上向き、下向きの傾向を示し、前年同月比は量的水準の変動を示します。

(1) 鉱工業指数<生産・出荷・在庫>

<個別判断> 一進一退の動きとなっている (前月からの判断推移 →)

<生産指数>

■ 4月の鉱工業生産指数(季節調整済値)は **97.3** (前月比 ▲4.5 %※)となり、2か月連続の低下となった。前年同月比では ▲6.6 %となり、3か月ぶりに前年同月水準を下回った。
※業種別で見ると、汎用機械工業、業務用機械工業、パルプ・紙・紙加工品工業、プラスチック製品工業の23業種中17業種が上昇し、化学工業、輸送機械工業、生産用機械工業、食料品工業など6業種が低下した。

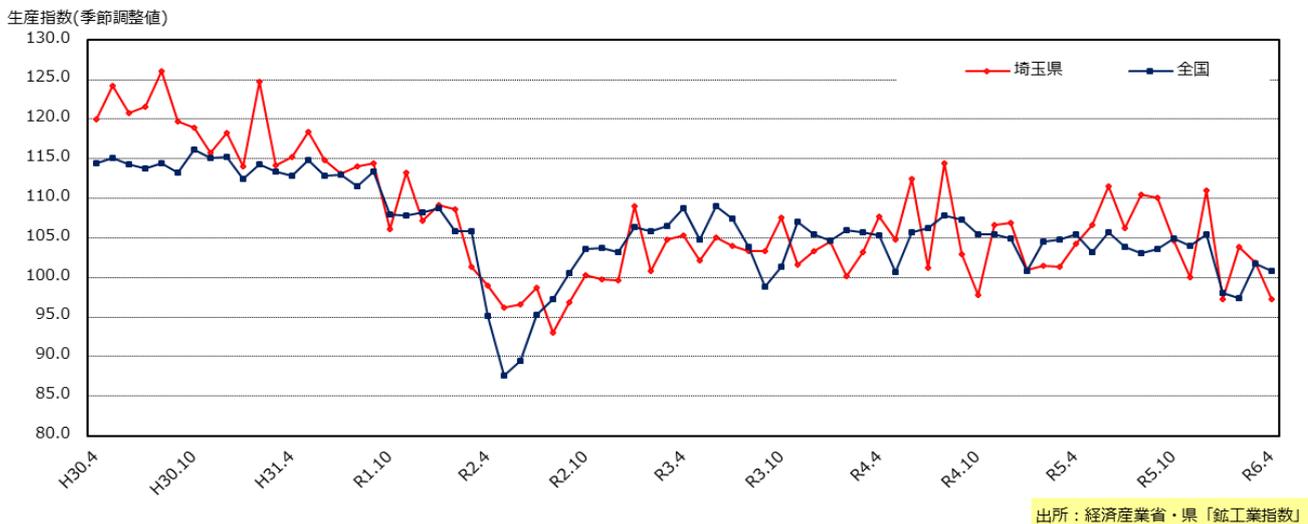


<参考> 業種別生産ウエイト

- 埼玉県の鉱工業全体に占める業種別の生産ウエイトは以下の通りです。
- ①食料品20.4% ②化学16.0% ③輸送機械10.4% ④プラスチック製品6.8% ⑤汎用機械6.7%
 - ⑥印刷業6.6% ⑦生産用機械3.8% ⑧パルプ・紙・紙加工品3.8% ⑨電気機械3.8%
 - ⑩非鉄金属3.5% その他13業種18.2%

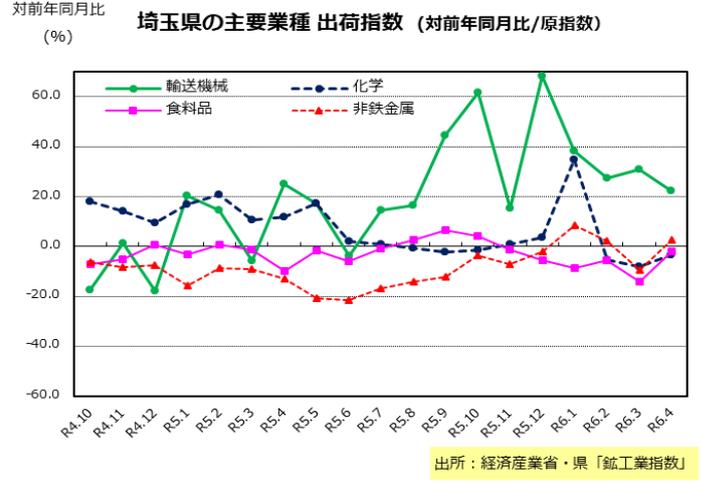
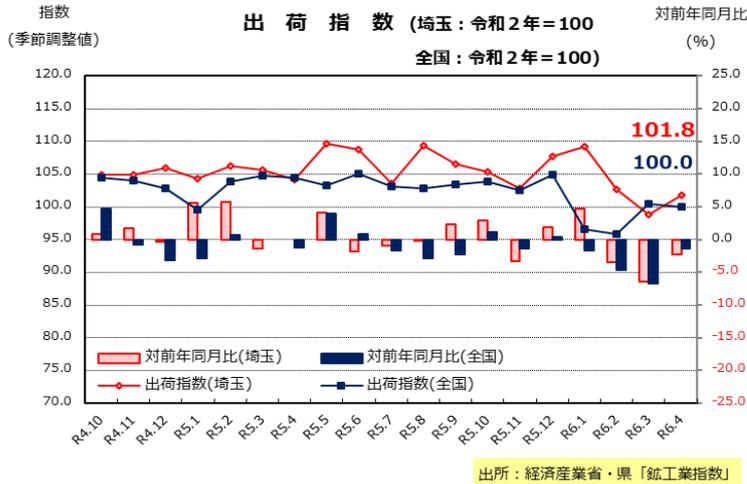
【出所】 県「鉱工業指数」、基準時=令和2年

<参考> 生産指数(季節調整済値)の中長期推移 (埼玉: 令和2年=100、全国: 令和2年=100)



<出荷指数>

■ 4月の鉱工業出荷指数(季節調整済値)は **101.8** (前月比 **+3.0 %**※)となり、3か月ぶりの上昇となった。
 前年同月比では **▲2.3 %**となり、3か月連続で前年同月水準を下回った。
 ※業種別で見ると、化学工業、情報通信機械工業、輸送機械工業、その他工業など23業種中21業種が上昇し、
 生産用機械工業、プラスチック製品工業の2業種が低下した。



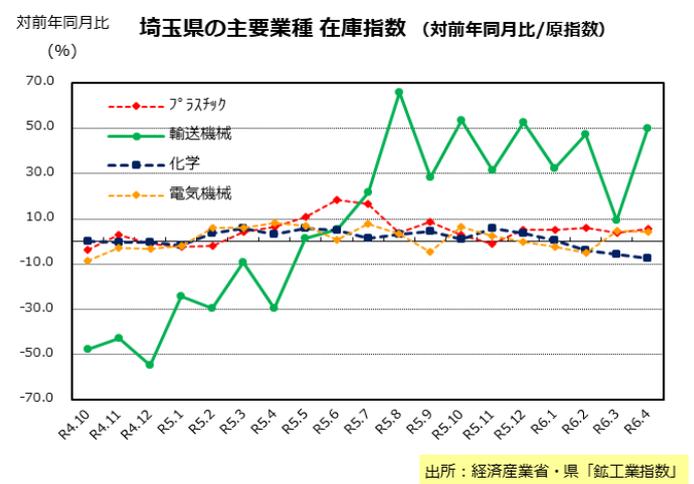
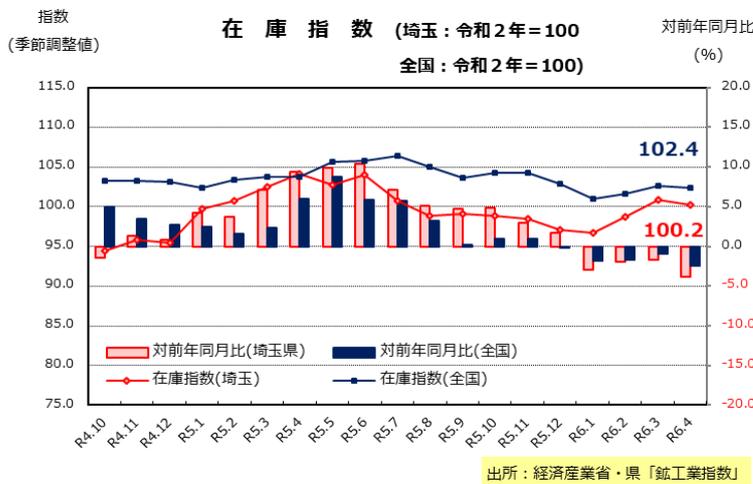
<参考>業種別出荷ウエイト

- 埼玉県の鉱工業全体に占める業種別の出荷ウエイトは以下の通りです。
- ①化学20.5% ②食料品15.3% ③輸送用機械12.7% ④汎用機械8.6% ⑤印刷業5.3%
 - ⑥プラスチック製品4.8% ⑦鉄鋼業3.7% ⑧情報通信機械3.5% ⑨生産用機械3.4%
 - ⑩業務用機械3.4% その他13業種18.8%

【出所】県「鉱工業指数」、基準時=令和2年

<在庫指数>

■ 4月の鉱工業在庫指数(季節調整済値)は **100.2** (前月比 **▲0.6 %**※)となり、3か月ぶりの低下となった。
 前年同月比では **▲3.8 %**となり、4か月連続の低下となった。
 ※業種別で見ると、業務用機械工業、プラスチック製品工業、輸送機械工業、皮革製品工業など21業種中8業種が上昇し、
 生産用機械工業、電気機械工業、化学工業、情報通信機械工業など13業種が低下した。



<参考>業種別在庫ウエイト

- 埼玉県の鉱工業全体に占める業種別の在庫ウエイトは以下の通りです。
- ①プラスチック製品13.3% ②生産用機械11.9% ③化学10.7% ④窯業・土石製品9.4%
- ⑤電気機械7.9% ⑥非鉄金属6.9% ⑦情報通信機械5.7% ⑧金属製品5.4% ⑨電子部品・デバイス5.4%
- ⑩鉄鋼業4.9% その他11業種18.5%

【出所】 県「鉱工業指数」、基準時=令和2年



鉱工業指数

- ・ 製造業と鉱業の生産・出荷・在庫の動きについて、基準時点(令和2年)を100として指数化したものです。全国の数値は、令和5年6月公表(令和5年4月分)より、埼玉県の数値は、令和6年6月公表(令和6年4月分)より、基準時点を平成27年から令和2年へ改定しています。
- ・ 生産指数と出荷指数は、景気の山、谷とほぼ同じ動きを示すとされ、景気動向指数の一致系列に入っています。
- ・ 埼玉県の鉱工業生産は、県内総生産の2割を超える水準となっており、生産活動の動きが景気に敏感に反応することから、鉱工業指数は景気観測には欠かせない指標です。

(2) 雇用

<個別判断> 持ち直している (前月からの判断推移 →)

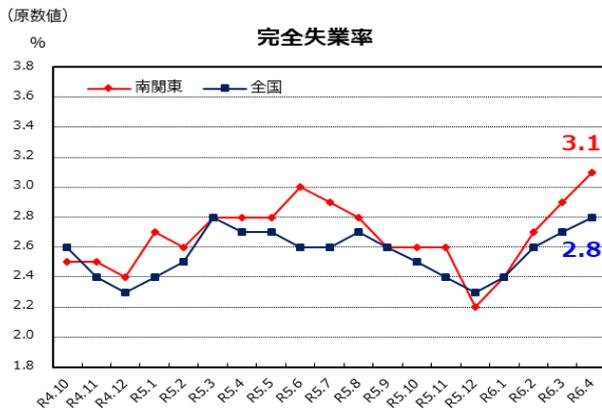
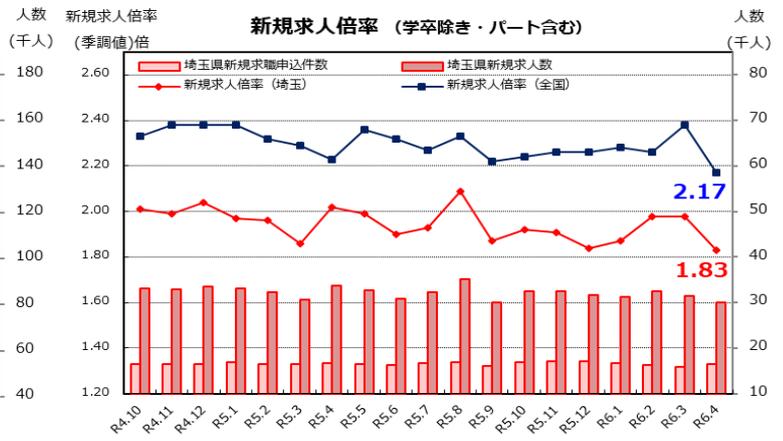
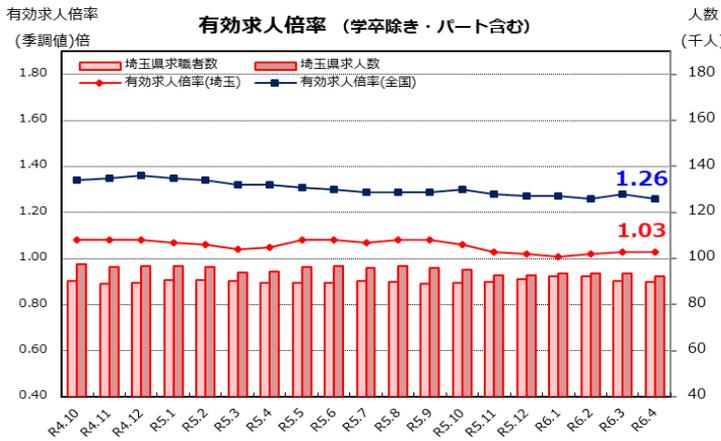
<有効求人倍率と完全失業率>

■ 4月の有効求人倍率(季節調整値、新規学卒者除きパートタイム労働者含む)は **1.03** 倍(前月比 ± 0.00 ポイント 前年同月比 $\blacktriangle 0.04$ ポイント)となった。新規求人倍率(季節調整値)は **1.83** 倍(前月比 $\blacktriangle 0.15$ ポイント 前年同月比 $\blacktriangle 0.15$ ポイント)となった。

県内を就業地とする求人数を用い算出した就業地別の有効求人倍率(季節調整値)は **1.18**倍。

■ 4月の完全失業率(南関東)は **3.1** %(前月比 $\ast +0.2$ ポイント、前年同月比 $+0.3$ ポイント)。

※原数値



CHECK! 完全失業率

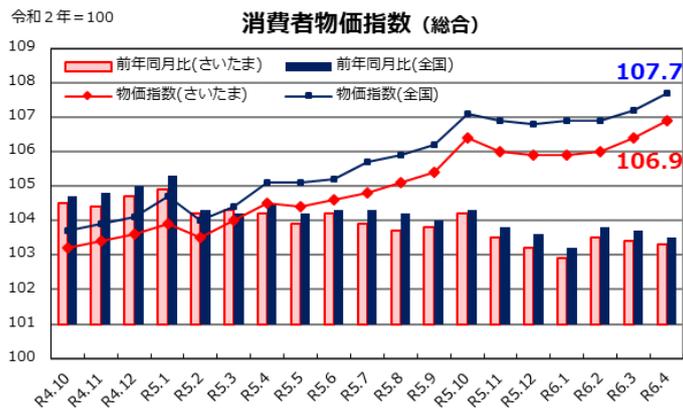
- ・ 完全失業率は労働力人口に占める完全失業者の割合です。
- ・ 完全失業者とは仕事がないものの、就業を希望しており、仕事があればすぐ就くことができる者をさします。

(3)消費者物価

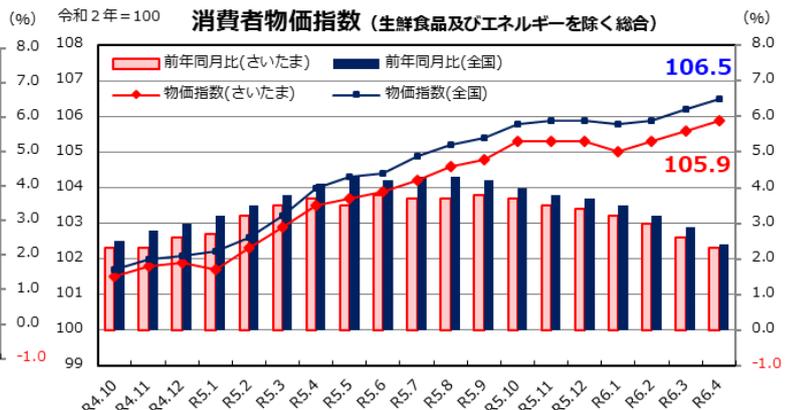
<個別判断> 上昇しているものの、緩やかな基調となっている（前月からの判断推移 →）

<消費者物価>

- 4月の消費者物価指数(さいたま市、令和2年=100)は総合指数で **106.9** となり、前月比 **+0.4** % 前年同月比は **+2.3** %となった。
- 前月との比較で、内訳を寄与度でみると「教養娯楽」、「食料」などは上昇した。
なお、「保険医療」などは下落した。前年同月から 2.3%上昇した内訳を寄与度でみると、「食料」、「教養娯楽」などの上昇が要因となっている。なお、「光熱・水道」は下落した。
- 生鮮食品及びエネルギーを除く総合指数は **105.9** となり、前月比 **+0.3** %、前年同月比は **+2.3** %となった。



出所：総務省「消費者物価指数」・埼玉県「消費者物価指数速報」



出所：総務省「消費者物価指数」・埼玉県「消費者物価指数速報」

CHECK! 消費者物価指数

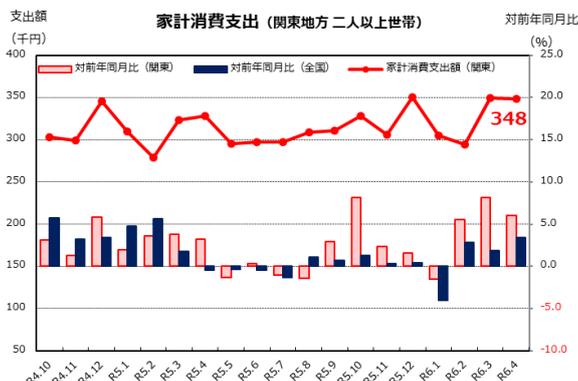
- ・消費者が購入する財やサービスなどの物価の動きを把握するために指数化された統計資料です。CPI (= Consumer Price Index)とも略されます。
- ・一般に、当該指数が持続的に上昇(下落)基調にあるなど、持続的な物価上昇(下落)がみられる場合にインフレ(デフレ)と判断されます。日銀は平成25年1月に「物価安定の目標」を消費者物価の前年比上年率2%と定め、各種金融緩和政策を実施・継続しています。

(4)消費

<個別判断> 一部に弱い動きがみられるものの、底堅く推移している（前月からの判断推移 →）

ア 家計消費

- 4月の家計消費支出(関東地方、2人以上世帯)は **348** 千円(前年同月比 **+6.0** %)となり、3か月連続で前年同月実績を上回った。



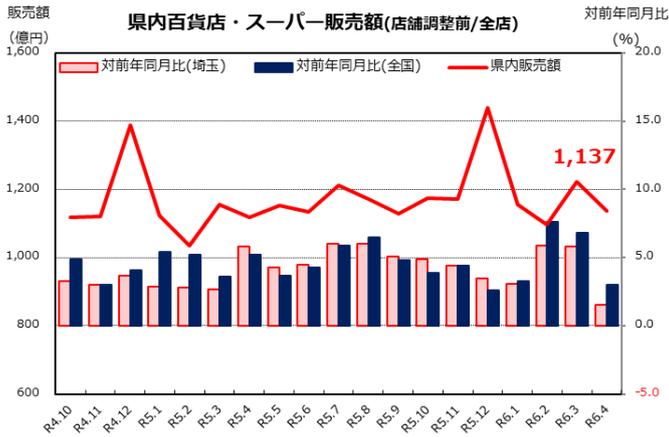
出所：総務省統計局「家計調査報告」

CHECK! 家計消費支出

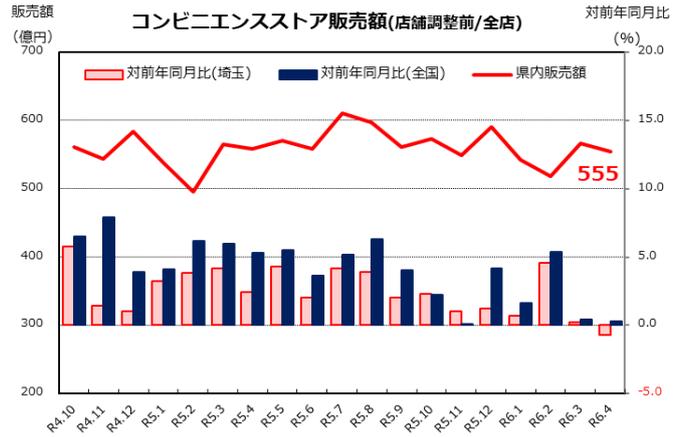
- ・全国約9千世帯を対象とする調査から計算される1世帯当たりの月間平均支出で、消費動向を消費した側からつかむことができます。
- ・家計消費支出は景気動向指数の遅行系列に入っています。核家族化により世帯人数が減少するなど、1世帯当たりの支出は長期的に減少する傾向があり、その影響を考慮する必要があります。

イ 百貨店・スーパー、コンビニエンスストア、家電大型専門店、ドラッグストア、ホームセンター販売額

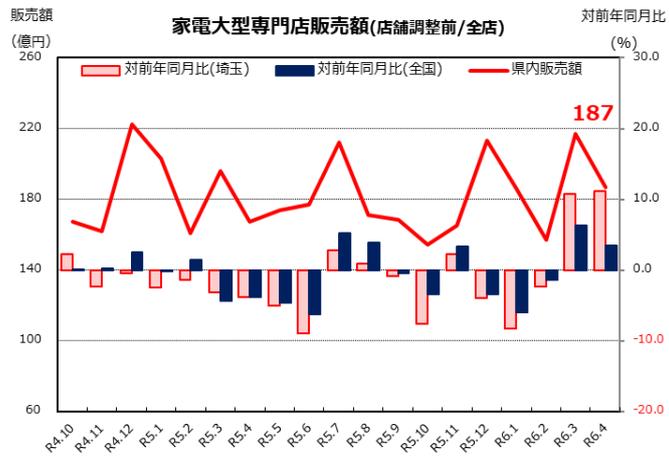
■ 4月の百貨店・スーパー販売額(県内全店)は **1,137** 億円(前年同月比 **+1.5%**)となり、23か月連続で前年同月実績を上回った(2020年3月に調査対象事業所の見直しを実施。前年同月対比増減率は補正済)。
 ※業態別では百貨店(12店舗)の販売額は106億円、前年同月比▲3.3%。スーパーマーケット(445店舗)の販売額は1,030億円、前年同月比+2.0%。
 ■ 4月のコンビニエンスストア販売額(県内全店)は **555** 億円(前年同月比 **▲0.7%**)となり、30か月ぶりに前年同月実績を下回った(速報値)。
 ■ 4月の家電大型専門店販売額(県内全店)は **187** 億円(前年同月比 **+11.2%**)となり、2か月連続で前年同月実績を上回った(速報値)。
 ■ 4月のドラッグストア販売額(県内全店)は **412** 億円(前年同月比 **+2.7%**)となり、23か月連続で前年同月実績を上回った(速報値)。
 ■ 4月のホームセンター販売額(県内全店)は **196** 億円(前年同月比 **+1.2%**)となり、2か月連続で前年同月実績を上回った(速報値)。



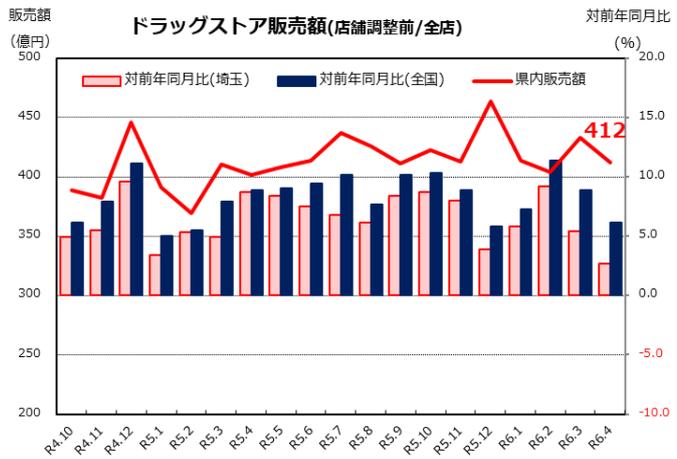
出所：関東経済産業局「百貨店・スーパー販売の動向」



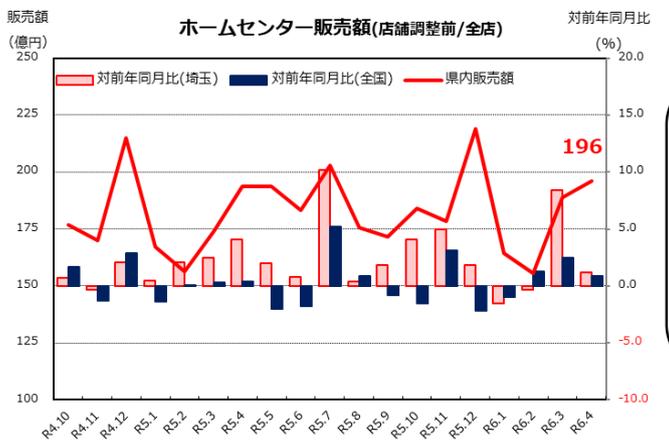
出所：関東経済産業局「百貨店・スーパー販売の動向」



出所：関東経済産業局「百貨店・スーパー販売の動向」



出所：関東経済産業局「百貨店・スーパー販売の動向」



出所：関東経済産業局「百貨店・スーパー販売の動向」



百貨店・スーパー、コンビニエンスストア、家電大型専門店、ドラッグストア、ホームセンター販売額

・大型百貨店(売場面積が政令指定都市で3,000㎡以上、その他1,500㎡以上)と大型スーパー(売場面積1,500㎡以上)における販売額は、消費動向を消費された側から捉えた代表的な業界統計です。
 ・最近ではコンビニやドラッグストア等による取扱商品の多様化が進み、様々な業態の消費動向を幅広くとらえることが必要となっています。

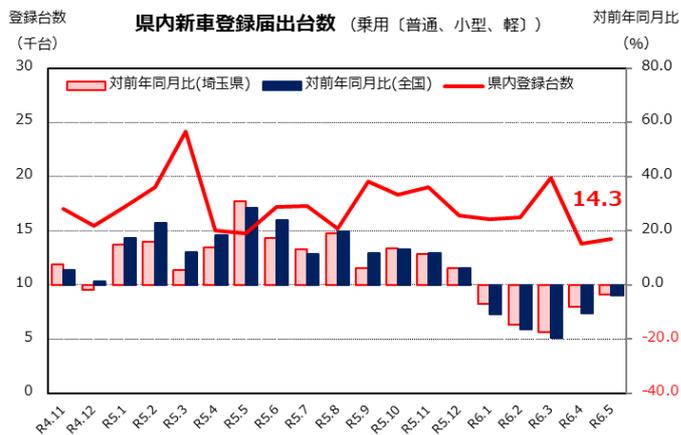
ウ 新車登録・届出台数

■ 5月の新車登録・届出台数は **14.3** 千台
(前年同月比 **▲3.6** %)となり、5か月連続で
前年同月実績を下回った。



新車登録・届出台数

- 消費されるモノで代表的な高額商品である、自動車販売状況を把握するもので、百貨店・スーパー販売額等と同様、消費動向を消費された側からとらえた業界統計です。

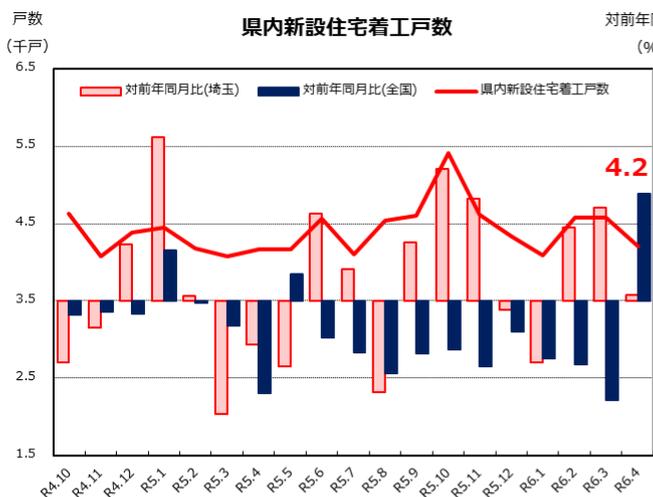


出所：日本自動車販売協会連合会・全国軽自動車協会連合会
埼玉県自動車販売店協会・埼玉県軽自動車協会

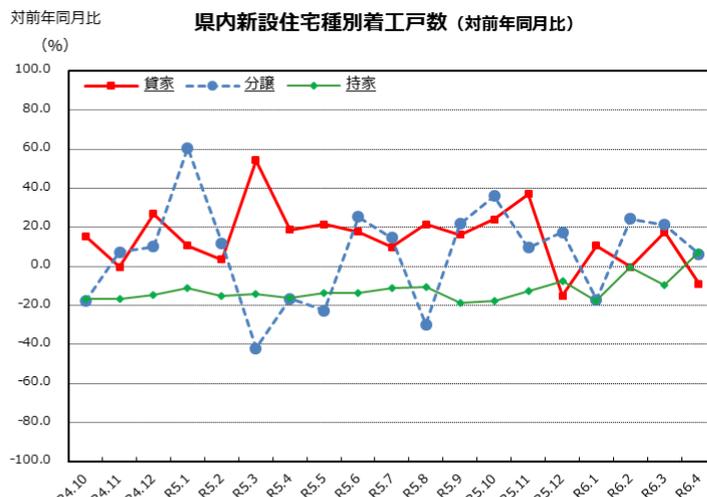
(5)住宅投資

<個別判断> やや弱含みがみられる (前月からの判断推移 →)

■ 4月の新設住宅着工戸数は **4,203** 戸(前年同月比 **+0.8** %)となり、3か月連続で前年同月実績を上回った。
持家が **1,034** 戸(同 **+7.3** %)、貸家が **1,436** 戸(同 **▲8.9** %)、分譲が **1,725** 戸(同 **+6.3** %)となっている。



出所：国土交通省「建築着工統計調査」



出所：国土交通省「建築着工統計調査」



新設住宅着工戸数

- 住宅投資はGDPのおおむね3%程度にすぎませんが、マンションや家を作るには色々な材料が必要となり、また、建設労働者など多くの人に働いてもらわなければなりません。さらには入居する人は電気製品などを新たに買換えることが多く、様々な経済効果を生み出します。
- 住宅投資は多額の資金を要するため、短期的な所得変動よりも、景気停滞期や回復初期における金利の低下、地価・建築コストの安定、景気対策などが誘因となると考えられます。

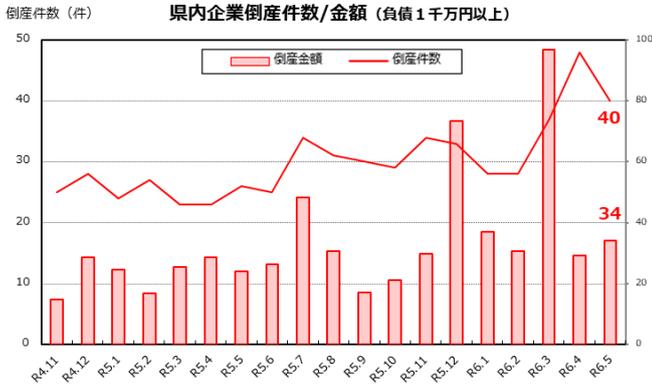
(6) 企業動向

ア 倒産

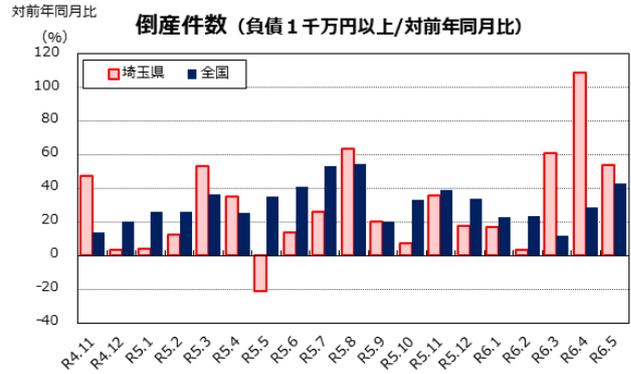
＜個別判断＞ 増加基調にある（前月からの判断推移 →）

■ 5月の企業倒産件数は **40** 件(前年同月比 **+14** 件) となった。産業別では建設業が11件と最多となり、サービス業他10件、卸売業 9件と続いた。

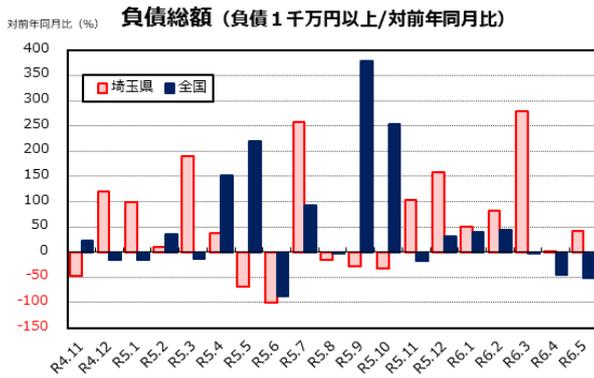
■ 負債総額は **34.16** 億円(前年同月比 **+10.12** 億円)。負債10億円以上の大型倒産の発生はなかった。



出所：東京商工リサーチ「企業倒産状況」(全国・埼玉県)



出所：東京商工リサーチ「企業倒産状況」(全国・埼玉県)

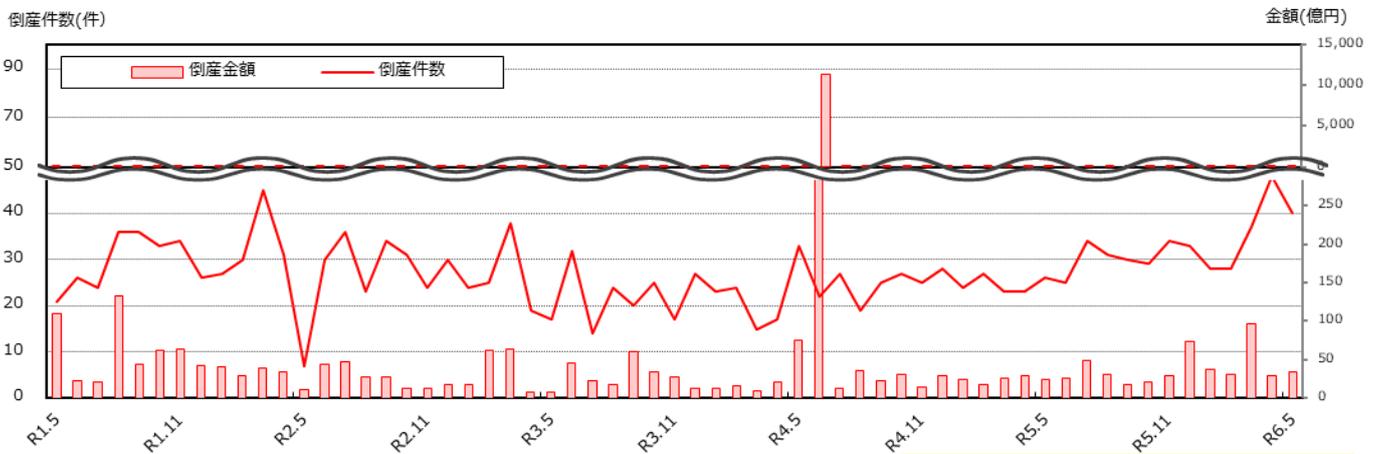


出所：東京商工リサーチ「企業倒産状況」(全国・埼玉県)

CHECK! 倒産

- ・ 企業が債務の支払不能や、経済活動を続けることが困難になった状態を指します。
- ・ 売上が増加している黒字企業でも、必要資金が不足し、倒産するケースがあります。
- ・ 一方、倒産により企業の新陳代謝が図られ、ヒト・モノ・カネの循環が円滑になる一面もあるといわれます。

＜参考＞ 県内企業倒産件数/金額 中期的推移(負債1千万円以上)



出所：東京商工リサーチ「企業倒産状況」(埼玉県)

＜個別判断＞持ち直しに足踏みがみられる（前月からの判断推移）

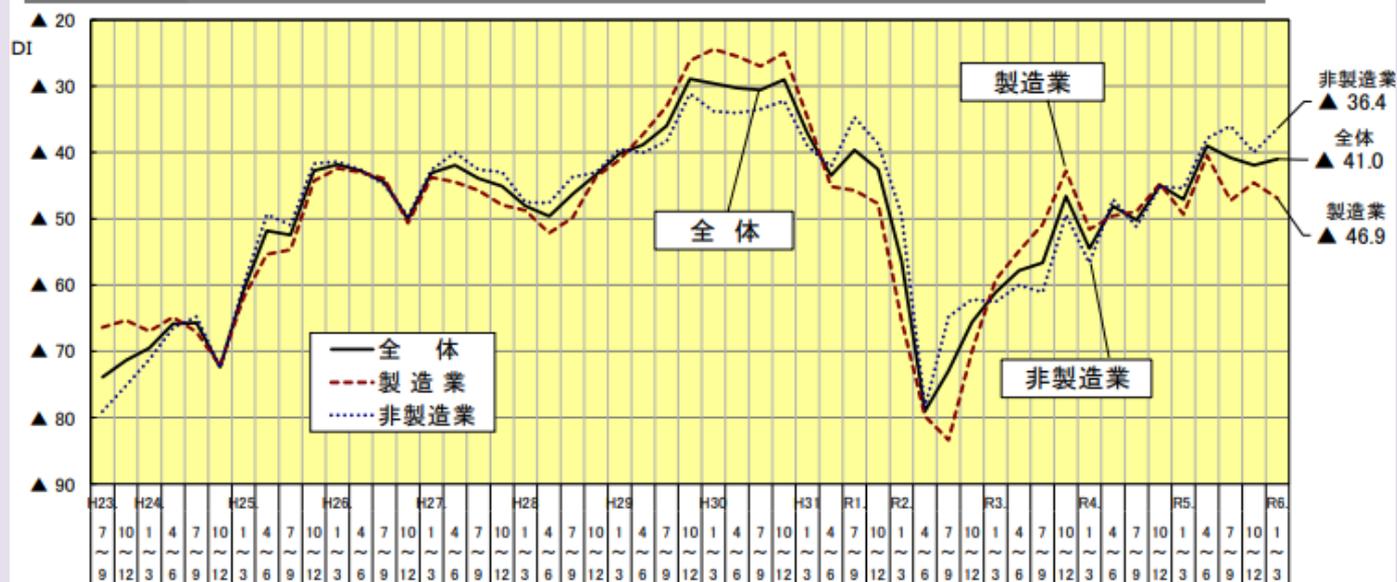
《「埼玉県四半期経営動向調査（令和6年1～3月期）」》

自社業界の景気について「好況である」とみる企業は4.6%、「不況である」とみる企業は45.6%で、景況感DI（「好況である」－「不況である」企業の割合）は▲41.0となった。

前期（▲41.9）から0.9ポイント増加し、3期ぶりに改善した。

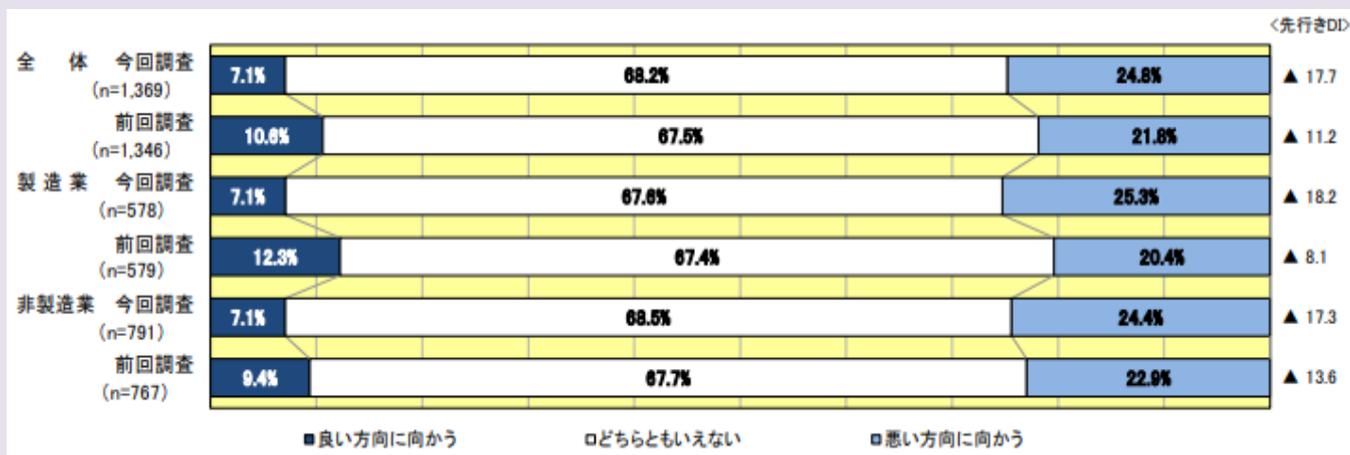
業種別にみると、製造業（▲46.9）は2期ぶりに悪化し、非製造業（▲36.4）は2期ぶりに改善した。

	当期DI (R6.1-3)	前期比 (R5.10-12)	前年同期比 (R5.1-3)	来期見通しDI (R6.4-6の見通し)	前期比[前回調査] (R6.1-3の見通し)
全体	▲41.0	+0.9	+6.1	▲11.9	+5.8
製造業	▲46.9	▲2.4	+2.4	▲12.1	+6.0
非製造業	▲36.4	+3.6	+9.0	▲11.7	+5.6



■来期（令和6年4～6月期）の見通し

先行きについては、「良い方向に向かう」とみる企業は9.5%（前回調査(R5.10-12月)比+2.4ポイント）、「悪い方向に向かう」とみる企業は21.4%（前回調査比▲3.4ポイント）だった。先行きDIは▲11.9（前回調査比+5.8ポイント）と、2期ぶりに改善した。



本文中の割合(%)については、小数点第2位を四捨五入して表記しています。

《財務省関東財務局「法人企業景況予測調査（令和6年4～6月期）」（埼玉県分）》

現状判断は、「下降」超幅が拡大

- 6年4～6月期の企業の景況判断BSIをみると、全規模・全産業ベースで「下降」超幅が拡大している。これを規模別にみると、大企業は「下降」超に転じ、中堅企業は「下降」超幅が縮小し、中小企業は「下降」超幅が拡大している。
- 業種別にみると、製造業、非製造業とも「下降」超幅が拡大している。
- 先行きについては、大企業は7～9月期に均衡となるものの、10～12月期に再び「下降」超に転じる見通し、中堅企業は7～9月期に「上昇」超に転じる見通し、中小企業は「下降」超で推移する見通しとなっている。

〔企業の景況判断BSI〕

(前期比「上昇」－前期比「下降」社数構成比)

【単位：%ポイント】

	6年1～3月 前回調査	6年4～6月 現状判断	6年7～9月 見通し	6年10～12月 見通し
全規模・全産業	(▲4.9)	▲18.8(▲1.7)	▲2.3(7.3)	0.0
大企業	(6.3)	▲7.9(0.0)	0.0(4.7)	▲1.6
中堅企業	(▲9.1)	▲6.9(10.6)	2.8(7.6)	4.2
中小企業	(▲7.6)	▲27.6(▲7.6)	▲5.2(8.2)	▲1.1
製造業	(▲3.9)	▲33.1(0.0)	1.6(10.2)	▲0.8
非製造業	(▲5.6)	▲8.8(▲3.1)	▲4.9(5.0)	0.5

(注) () 書は前回(6年1～3月期)調査結果。

(参考) 寄与の大きい業種

業種	上昇・下降	業種名
製造業	上昇	—
		—
	下降	情報通信機械器具製造業 自動車・同附属品製造業
非製造業	上昇	宿泊業、飲食サービス業 その他のサービス業
		建設業 卸売業



BSI (Business Survey Index)の計算方法

例えば「貴社の景況」において、以下の①～④の回答結果が得られた場合のBSIは・・・

- ① (前期に比べて) 「上昇」と回答した企業の構成比 : 40.0%
- ② (前期に比べて) 「不変」と回答した企業の構成比 : 25.0%
- ③ (前期に比べて) 「下降」と回答した企業の構成比 : 30.0%
- ④ (前期に比べて) 「不明」と回答した企業の構成比 : 5.0%

BSIの計算式

①－③ = (「上昇」と回答した企業の構成比 40.0%) - (「下降」と回答した企業の構成比 30.0%)
= 10.0%ポイントとなります。

ウ 設備投資

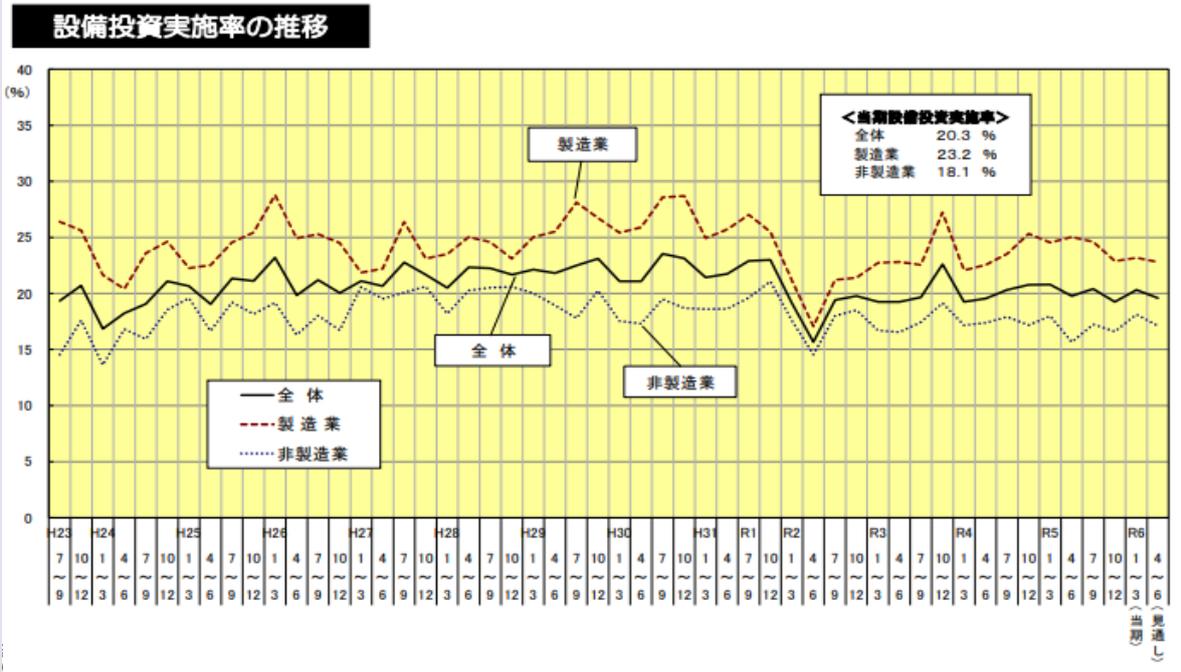
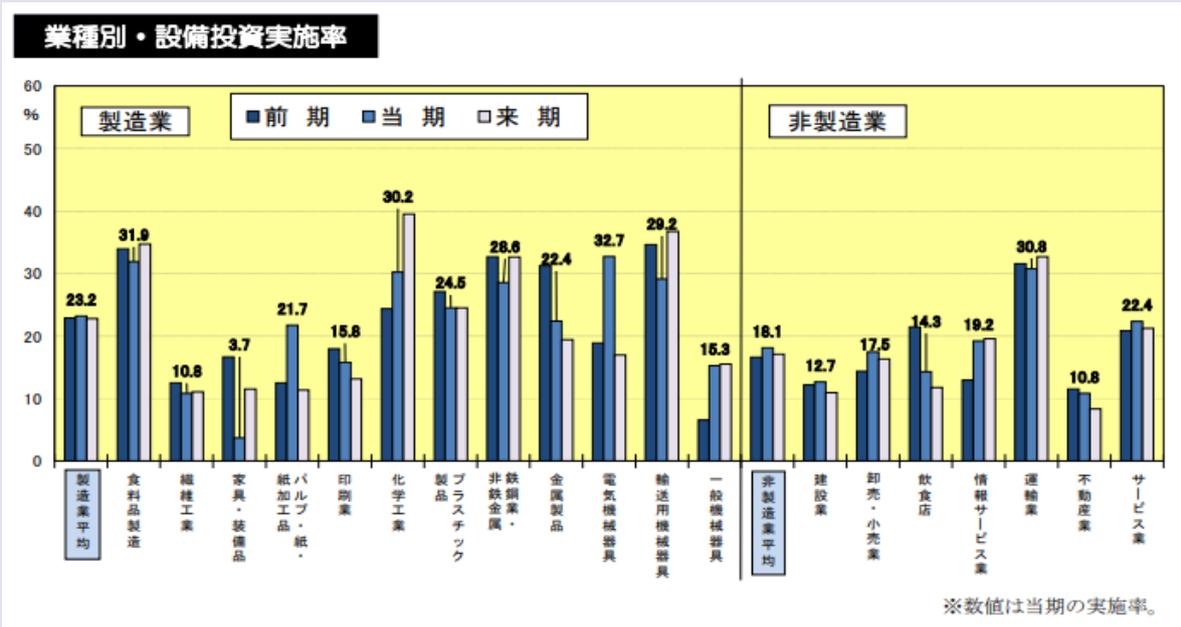
<個別判断> 持ち直している（前月からの判断推移→）

《「埼玉県四半期経営動向調査（令和6年1～3月期）」》

当期に設備投資を実施した企業は20.3%で、前期（19.3%）から1.1ポイント増加し、2期ぶりに増加した。内容をみると、「生産・販売設備（建設機械を含む）」が49.3%で最も高く、「車輛・運搬具」が29.4%、「情報化機器」が22.4%と続いている。目的では、「更新、維持・補修」が65.3%で最も高く、「生産・販売能力の拡大」が32.8%、「合理化・省力化」が22.0%と続いている。

■ 来期（令和6年4～6月期）の見通し

来期に設備投資を実施する予定の企業は19.6%で、当期（20.3%）から0.7ポイント減少する見通しである。



※本文中の割合(%)については、小数点以第2位を四捨五入して表記しています。

設備投資（除く土地購入額、含むソフトウェア投資額）

— 6年度は、増加見込み —

- 6年度の「設備投資」は、全規模・全産業ベースで前年比 18.0%の増加見込みとなっている。
- 規模別にみると、大企業は同 19.9%、中小企業は同 34.5%の増加見込み、中堅企業は同 7.3%の減少見込みとなっている。
- 業種別にみると、製造業は同 22.5%、非製造業は同 16.4%の増加見込みとなっている。

〔企業の設備投資〕

（前年比増減率：％）

	設 備 投 資
全規模・全産業	18.0 (13.8)
大 企 業	19.9 (15.8)
中 堅 企 業	▲ 7.3 (▲ 23.6)
中 小 企 業	34.5 (36.8)
製 造 業	22.5 (82.4)
非 製 造 業	16.4 (▲ 15.5)

（注）1. () 書は前回（6年1～3月期）調査結果。
 2. 「金融業、保険業」の売上高は調査対象外。

4 経済情報

(1) 各種経済報告等

ア 内閣府「月例経済報告（6月）」

《我が国経済の基調判断》：令和6年6月27日公表

景気は、このところ足踏みもみられるが、緩やかに回復している。

- ・個人消費は、持ち直しに足踏みがみられる
- ・設備投資は、持ち直しの動きがみられる
- ・輸出は、持ち直しの動きに足踏みがみられる
- ・生産は、このところ持ち直しの動きがみられる
- ・企業収益は、総じてみれば改善している
- ・企業の業況判断は、改善している。ただし、製造業の一部では、一部自動車メーカーの生産・出荷停止による影響がみられる
- ・雇用情勢は、改善の動きがみられる
- ・消費者物価は、緩やかに上昇している

先行きについては、雇用・所得環境が改善する下で、各種政策の効果もあって、緩やかな回復が続くことが期待される。ただし、欧米における高い金利水準の継続に伴う影響や中国経済の先行き懸念など、海外景気の下振れが我が国の景気を下押しするリスクとなっている。また、物価上昇、中東地域をめぐる情勢、金融資本市場の変動等の影響に十分注意する必要がある。さらに、令和6年能登半島地震の経済に与える影響に十分留意する必要がある。

《政策の基本的態度》

「経済財政運営と改革の基本方針2024～賃上げと投資がけん引する成長型経済の実現～」等に基づき、物価上昇を上回る賃金上昇の実現や官民連携投資による社会課題解決と生産性向上に取り組む。

「デフレ完全脱却のための総合経済対策」及びその裏付けとなる令和5年度補正予算並びに令和6年度予算を迅速かつ着実に執行する。また、足元の物価動向の中、年金生活世帯や中小企業にとっては厳しい状況が続いており、まずは、早急に着手可能で即効性のある対策を講じるなど、二段構えでの対応を行っていく。

「被災者の生活と生業（なりわい）支援のためのパッケージ」に基づき、令和6年能登半島地震の被災者の生活、生業の再建をはじめ、被災地の復旧・復興に至るまで、予備費を活用し切れ目なく対応する。

日本銀行には、経済・物価・金融情勢に応じて適切な金融政策運営を行うことにより、賃金と物価の好循環を確認しつつ、2%の物価安定目標を持続的・安定的に実現することを期待する。政府と日本銀行は、引き続き緊密に連携し、経済・物価動向に応じて機動的な政策運営を行っていく。こうした取組により、デフレからの完全脱却、成長型の新たな経済ステージへの移行を実現していく。

【前月判断からの変更項目】

項目	5月月例	6月月例
公共投資	堅調に推移している	底堅く推移している
生産	一部自動車メーカーの生産・出荷停止の影響により、生産活動が低下していたが、このところ持ち直しの動きがみられる	このところ持ち直しの動きがみられる

《今月の判断》：令和6年6月19日公表

管内経済は、一部に弱い動きがみられるものの、持ち直している。

- ・生産活動 一進一退ながら弱含み
- ・個人消費 緩やかな上昇傾向が続く中、一部に弱い動きがみられる
- ・雇用情勢 持ち直している
- ・設備投資 前年度を上回る見込み
- ・公共工事 2か月ぶりに前年同月を上回った
- ・住宅着工 4か月ぶりに前年同月を上回った

《今月のポイント》

生産活動は、生産用機械工業をはじめ11業種が低下し、3か月ぶりの低下となった。

個人消費は、百貨店・スーパー販売額が32か月連続で前年同月を上回った。乗用車新規登録台数は4か月連続で前年同月を下回った。

雇用情勢は、有効求人倍率が横ばいだった。総じてみると管内経済は、一部に弱い動きがみられるものの、持ち直している。

今後については、国際情勢の動向や物価上昇等が国内経済に与える影響について留意する必要がある。

■ **鉱工業生産：一進一退ながら弱含み**

○生産指数：100.3、前月比▲2.6%と3か月ぶりの低下。

- ・生産用機械工業、汎用機械工業、業務用機械工業等の11業種が低下。
- ・電気機械工業、繊維工業等の7業種が上昇。

■ **個人消費：緩やかな上昇傾向が続く中、一部に弱い動きがみられる**

○百貨店・スーパー販売：7,883億円、全店前年同月比+3.0%と32か月連続で前年を上回る。
(既存店前年同月比+2.0%)

百貨店：2,240億円、全店前年同月比+6.2%と26か月連続で前年を上回る。
(既存店前年同月比+6.3%)

「その他の商品」、「身の回り品」、「婦人・子供服・洋品」が好調。

スーパー：5,643億円、全店前年同月比+1.8%と20か月連続で前年を上回る。
(既存店前年同月比+0.4%)

「飲食料品」が好調。

○コンビニ販売：4,642億円、前年同月比+0.2%と29か月連続で前年を上回る。

○家電大型専門店販売額：1,777億円、前年同月比+5.7%と2か月連続で前年を上回る。

○ドラッグストア販売額：3,058億円、前年同月比+5.9%と36か月連続で前年を上回る。

○ホームセンター販売額：1,288億円、前年同月比+2.0%と10か月連続で前年を上回る。

○乗用車新規登録台数：95,552台、前年同月比▲8.3%と4か月連続で前年を下回る。

普通乗用車：49,534台、前年同月比+2.8%と3か月ぶりに前年を上回る。

小型乗用車：20,622台、前年同月比▲13.8%と7か月連続で前年を下回る。

軽乗用車：25,396台、前年同月比▲20.7%と5か月連続で前年を下回る。

東京圏：56,771台、前年同月比▲5.9%と4か月連続で前年を下回る。

東京圏以外：38,781台、前年同月比▲11.5%と4か月連続で前年を下回る。

○消費支出金額(関東・二人以上の世帯)：1世帯当たり348,035円、

前年同月比(実質)+3.3%と3か月連続で前年を上回る。

■雇用情勢：持ち直している

- 有効求人倍率（季節調整値）：1.30倍、前月と横ばい。
 - 東京圏：1.29倍、前月差▲0.01ポイントと3か月ぶりに低下。
 - 東京圏以外：1.30倍、前月と横ばい。
- 新規求人倍率（季節調整値）：2.32倍、前月差▲0.18ポイントと4か月ぶりに低下。
 - 東京圏：2.45倍、前月差▲0.23ポイントと4か月ぶりに低下。
 - 東京圏以外：2.10倍、前月差▲0.11ポイントと4か月ぶりに低下。
- 新規求人数（季節調整値）：305,333人、前月比▲3.7%と2か月連続で減少。
 - 東京圏：202,824人、前月比▲5.1%と2か月連続で減少。
 - 東京圏以外：102,509人、前月比▲0.9%と3か月連続で減少。
- 新規求人数（原数値）：前年同月比▲2.2%と6か月連続で減少。
 - ・「宿泊業、飲食サービス業」、「製造業」、「建設業」等が低下に寄与。
- 南関東の完全失業率（原数値）：3.1%、前年同月差+0.3ポイントと3か月連続で前年を上回る。
- 事業主都合離職者数：32,070人、前年同月比+2.3%と2か月ぶりに増加。
 - 東京圏：24,559人、前年同月比+1.8%と2か月ぶりに増加。
 - 東京圏以外：7,511人、前年同月比+3.9%と2か月ぶりに増加。

■設備投資：前年度を上回る見込み

- 法人企業景気予測調査（令和6年4-6月期調査）
 - 全産業 前年度比+21.0%、製造業 同+28.5%、非製造業 同+17.3%
- 設備投資計画調査（2023年6月調査）
 - 首都圏：全産業 前年度比+23.9%、製造業 同+23.1%、非製造業 同+24.1%
 - 北関東甲信：全産業 前年度比+22.0%、製造業 同+18.6%、非製造業 同+29.6%

■公共工事：2か月ぶりに前年同月を上回った

- 公共工事請負金額：8,064億円、前年同月比+26.3%と2か月ぶりに前年を上回る。
 - 東京圏：5,713億円、前年同月比+36.3%と2か月ぶりに前年を上回る。
 - 東京圏以外：2,350億円、前年同月比+7.2%と4か月連続で前年を上回る。

■住宅着工：4か月ぶりに前年同月を上回った

- 新設住宅着工戸数：33,656戸、前年同月比+10.0%と4か月ぶりに前年を上回る。
 - 東京圏：26,747戸、前年同月比+11.7%と4か月ぶりに前年を上回る。
 - 東京圏以外：6,909戸、前年同月比+4.0%と11か月ぶりに前年を上回る。
 - ・都県別では、茨城県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、新潟県、静岡県において前年を上回る。

■参考

- 消費者物価指数（関東、生鮮食品を除く総合（4月））
 - ：107.0、前年同月比+2.0%と32か月連続で上昇。
 - 総合指数：107.6、前年同月比+2.3%。
 - ・総合指数の上昇に寄与した主な内訳：教養娯楽サービス、自動車等関係費、生鮮野菜。
 - ・総合指数の下落に寄与した主な内訳：ガス代。
- 国内企業物価指数（速報）：121.2、前月比+0.3%と3か月連続で上昇、前年同月比は0.9%。
- 企業倒産：倒産件数は2か月ぶりに前年同月を上回り、負債総額は2か月連続で前年同月を下回る。

《総括判断》令和6年4月22日公表

県内経済は、持ち直しのテンポが緩やかになっている

個人消費は、物価上昇の影響がみられるなか、回復に向けたテンポが緩やかになっている。生産活動は、弱含んでいる。雇用情勢は、人手不足を背景に企業の採用意欲が高い状況にあるなか、持ち直しつつある。

先行きについては、雇用・所得環境が改善する下で、各種政策の効果もあって、景気が持ち直していくことが期待される。ただし、世界的な金融引締めに伴う影響や中国経済の先行き懸念など、海外景気の下振れが景気を下押しするリスクとなっている。また、物価上昇、中東地域をめぐる情勢、金融資本市場の変動等の影響に十分注意する必要がある。さらに、令和6年能登半島地震の経済に与える影響に十分留意する必要がある。

【各項目の判断】

項目	判断	要点
個人消費	物価上昇の影響がみられるなか、回復に向けたテンポが緩やかになっている	スーパー販売額、コンビニエンスストア販売額、ドラッグストア販売額は前年を上回っているものの、物価上昇の影響によりそのテンポは緩やかになっている。百貨店販売額、家電大型専門店販売額、ホームセンター販売額は前年を下回っている。乗用車の新車登録届出台数は、一部メーカーの生産・出荷停止の影響により、普通車、小型車、軽乗用車いずれも前年を下回っている。旅行や飲食サービスなどは持ち直している。 このように個人消費は、回復に向けたテンポが緩やかになっている。
生産活動	弱含んでいる	生産を業種別にみると、生産用機械、プラスチック製品などが増加しているものの、化学、汎用機械、輸送機械が減少しており、全体としては、弱含んでいる。
雇用情勢	持ち直しつつある	有効求人倍率は低下しているものの、新規求人数は増加している。人手不足を背景に企業の採用意欲が高い状況にあるなか、雇用情勢は持ち直しつつある。
設備投資	5年度は増加見込みとなっている（全規模・全産業）	5年度の設備投資計画は、製造業、非製造業とも増加見込みとなっている。
企業収益	5年度は増益見込みとなっている（全規模）	5年度の経常利益は、製造業、非製造業とも増益見込みとなっている。
企業の景況感	『下降』超となっている（全規模・全産業ベース）	先行きについては、6年7～9月期に「上昇」超に転じる見通しとなっている。
住宅建設	前年を上回っている	新設住宅着工戸数をみると、持家は前年を下回っているものの、貸家、分譲住宅は前年を上回っており、全体として前年を上回っている。
公共事業	前年を下回っている	前払金保証請負金額をみると、国、独立行政法人等は前年を上回っているものの、都県、市町村が前年を下回っており、全体として前年を下回っている。

《総括判断》令和6年4月22日公表

管内経済は、持ち直しのテンポが緩やかになっている

個人消費は、物価上昇の影響がみられるなか、回復に向けたテンポが緩やかになっている。生産活動は、輸送機械、電気機械、生産用機械などが減少しており、弱含んでいる。雇用情勢は、人手不足を背景に企業の採用意欲が高い状況にあるなか、改善しつつある。

先行きについては、雇用・所得環境が改善する下で、各種政策の効果もあって、景気が持ち直していくことが期待される。ただし、世界的な金融引締めに伴う影響や中国経済の先行き懸念など、海外景気の下振れが景気を下押しするリスクとなっている。また、物価上昇、中東地域をめぐる情勢、金融資本市場の変動等の影響に十分注意する必要がある。さらに、令和6年能登半島地震の経済に与える影響に十分留意する必要がある。

【各項目別判断】

項目	判断	要点
個人消費	物価上昇の影響がみられるなか、回復に向けたテンポが緩やかになっている	百貨店販売額、スーパー販売額、コンビニエンスストア販売額、ドラッグストア販売額などは前年を上回っているものの、物価上昇の影響によりそのテンポは緩やかになっている。家電大型専門店販売額は前年を下回っている。乗用車の新車登録届出数は、一部メーカーの生産・出荷停止の影響により、普通車、小型車、軽乗用車いずれも前年を下回っている。宿泊や飲食サービスなどは、持ち直している。このように個人消費は、回復に向けたテンポが緩やかになっている。
生産活動	弱含んでいる	生産を業種別にみると、輸送機械、電気機械、生産用機械などが減少しており、全体としては、弱含んでいる。
雇用情勢	改善しつつある	有効求人倍率は低下しているものの、新規求人数は増加し、完全失業率は前年を下回っている。人手不足を背景に企業の採用意欲が高い状況にあるなか、雇用情勢は改善しつつある。
設備投資	5年度は増加見込みとなっている (全規模・全産業)	製造業では、窯業・土石などで減少見込みとなっているものの、非鉄金属、自動車・同附属品などで増加見込みとなっていることから、全体では増加見込みとなっている。非製造業では、卸売業などで減少見込みとなっているものの、運輸業、郵便業、学術研究、専門・技術サービス業などで増加見込みとなっていることから、全体では増加見込みとなっている。
企業収益	5年度は減益見込みとなっている (全規模)	製造業では、自動車・同附属品などで増益見込みとなっているものの、情報通信機械などで減益見込みとなっていることから、全体では減益見込みとなっている。非製造業では、学術研究、専門・技術サービス業などで減益見込みとなっているものの、情報通信業などで増益見込みとなっていることから、全体では増益見込みとなっている。
企業の景況感	『下降』超となっている (全規模・全産業)	大企業、中堅企業は「上昇」超幅が縮小し、中小企業は「下降」超幅が拡大している。先行きについては、全規模・全産業ベースで6年4～6月期に「上昇」超に転じる見通しとなっている。
住宅建設	前年を下回っている	新設住宅着工戸数をみると、貸家は前年を上回っているものの、持家、分譲住宅は前年を下回っており、全体として前年を下回っている。
公共事業	前年を上回っている	前払金保証請負金額をみると、市区町村は前年を下回っているものの、国、独立行政法人等、都県が前年を上回っており、全体として前年を上回っている。
輸出	前年を上回っている	通関実績（円ベース、東京税関と横浜税関の合計額）でみると、輸出は前年を上回っている。なお、輸入は前年を下回っている。

(2) 今月のキーワード 「中堅企業」

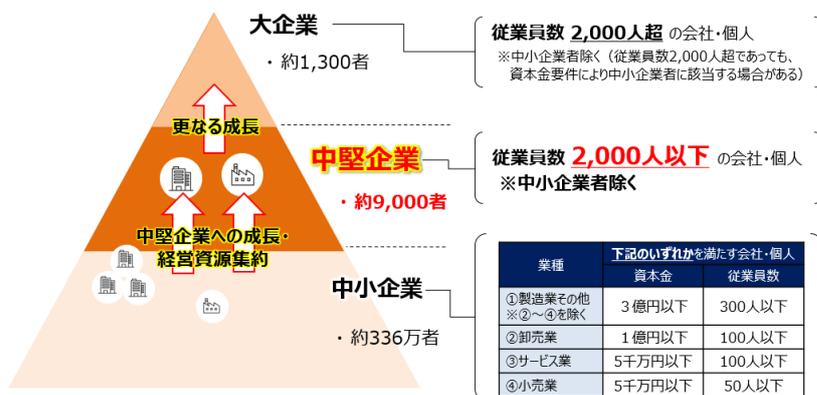
経済産業省は従業員 2,000 人以下の企業を「中堅企業」と新たに法的に位置づけ、地域経済のリーディングカンパニーとして成長の支援を強化することを決めました。今までも、中堅企業という言葉は頻りに利用されてきましたが、法律により定義づけられるのは今回が初めてとなります。中堅企業の位置づけを確認するとともに、県内の中堅企業への期待に触れてみたいと思います。

【中堅企業の位置づけ】

中堅企業は、規模拡大に伴い経営の高度化や商圏の拡大・事業の多角化といったビジネスの発展が見られる段階の企業群のことです。既存法令での定義も踏まえ、常時使用する従業員の数が 2,000 人以下の会社等（中小企業者を除く）を「中堅企業者」と定義しています。

大企業が海外現地での売上高増加率を大きく伸ばしているのに対し、中堅企業は国内・海外現地ともに売上高増加率が高く、国内経済の成長に大きく貢献しています。また、地方に立地する中堅企業は地域に良質な雇用を生み出すことから、地域の賃金水準の引き上げに貢献することも期待されます。

中堅企業者の定義



（出所）経済産業省 中堅企業等の成長促進に関するWG「中堅企業成長促進パッケージ」

【埼玉県内の中堅企業】

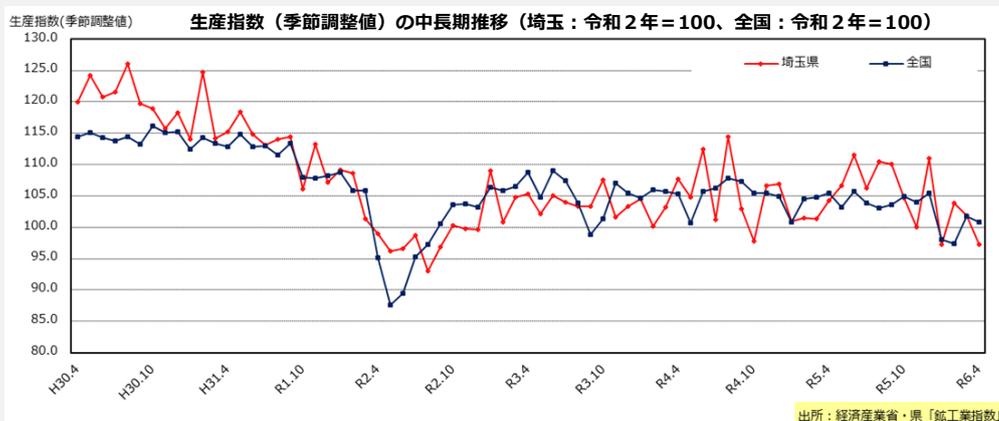
規模	2022年	2023年	2024年
大企業	14	14	14
中堅企業	168	166	165
中小企業	51,745	52,123	52,163
計	51,927	52,303	52,342

（出所）東京商工リサーチ

東京商工リサーチの企業データベースでは、2024年3月時点で埼玉県の中堅企業は165社でした。中堅企業の産業別構成比は、製造業が31.5%と最大で、次いで小売業28.5%と続きます。

中堅企業の産業別割合に製造業が多い点は、埼玉県の生産面に好影響を与えることが期待されます。近年、生産面の強弱を示す鉱工業生産指数（埼玉県）は低下傾向です。中堅や中堅を展望する中小製造業者の

成長が県内の生産力向上に資するものとなるか、また、地域の活性化にどのような影響を与えていくのか今後も注目していきたいと思います。



(3) 今月のトピック「埼玉県内企業の雇用」

現状判断は、「不足気味」超幅が縮小

- 財務省関東財務局「法人企業景気予測調査（埼玉県分）」によると、令和6年6月末時点の従業員数判断BSIをみると、全規模・全産業ベースで「不足気味」超幅が縮小している。
- 規模別にみると、大企業、中堅企業、中小企業いずれも「不足気味」超幅が縮小している。
- 業種別にみると、製造業、非製造業とも「不足気味」超幅が縮小している。
- 先行きについては、大企業、中堅企業、中小企業いずれも「不足気味」超で推移する見通しとなっている。

<従業員数判断 BSI>

(期末判断「不足気味」－「過剰気味」社数構成比)

【単位：%ポイント】

	6年3月末 前回調査	6年6月末 現状判断	6年9月末 見通し	6年12月末 見通し
全規模・全産業	(35.2)	32.9(28.6)	29.6(25.1)	29.6
大企業	(31.3)	30.2(23.4)	28.6(18.8)	27.0
中堅企業	(39.4)	38.9(31.8)	36.1(28.8)	38.9
中小企業	(35.0)	31.4(29.3)	27.3(26.1)	26.7
製造業	(26.8)	23.6(18.1)	19.7(15.7)	19.7
非製造業	(41.9)	39.4(36.9)	36.7(32.5)	36.7

※ () 内の数字は前回調査時（6年1～3月期）の調査結果

(回答法人数 309社、調査時点 令和6年5月15日)

～内容について、ご意見等お寄せください～

発行 令和6年6月28日
 作成 埼玉県 企画財政部 計画調整課 神戸（Jrハ）
 電話 048-830-2134
 Email a2130@pref.saitama.lg.jp